高等部研究

学部研究テーマ
～「わかる喜び」「学ぶ楽しさ」の実現を目指した授業改善～

実態差が幅広い高等部において、「社会の中で自分らしく豊かに生きていく力」を育てる授業を行うためには、生徒一人一人が「主体的にそして意欲的に学びを楽しむ」ことのできる教育環境を整え、「深く学ぶ」ことのできる授業実践を目指していきたい。今年度の高等部研究では、各教師が自分自身の授業を振り返り、見直し、実践を繰り返すことにより、教師一人一人の授業力および指導力の向上が図れることを目的としていく。

◎研究グループの概要

今年度の高等部は、知的障害教育課程であるⅠコースの生徒４１名、自立活動主体の教育課程であるⅡコースの生徒１名の計４２名が在籍し、一般就労を目指す生徒から医療的ケアを必要とする生徒まで、実態差は幅広い。Ⅰコースは、小学部から本校に在籍し基礎学習をより確実に積み重ねてきた生徒から、地域の中学校において集団性や社会性を育みながら教科学習を積み重ねてきた生徒など、学習における実態や定着状況は様々である。また、肢体不自由がある生徒、心疾患を抱えている生徒もおり、生徒の実態は多岐にわたる。Ⅱコースの生徒は、気管切開をしており、医療的ケアを必要としている。常時車椅子を使用しており、発声はないが、手を叩いたり、手を挙げて関わりに応じたりしてコミュニケーションを取ることが可能な実態である。

◎研究経過

①高等部全体での研修
- 「主体的・対話的で深い学び」について研修会を実施
  授業や単元における目標設定や評価基準、学習評価について、考え方の共通理解を図る。

②自己研修（国語、数学、ことばかずのいずれかの授業を、一人一事例挙げて授業検証）
- 指導案の作成
- 単元や目標、評価基準の設定
- 授業改善シートに、日々の授業を記録する。
- 授業改善シートで毎時間自分の授業を振り返り、指導方法を見直し、次の授業改善につなげる。

③事例発表
- 事例について、学部全員で動画や写真を見ながら、授業シートを活用して検証を行う。

授業改善シート

R4 高等部研究　「わかる授業」「学ぶ楽しさ」の実現を目指した授業改善

教科	数学	単元	「繰り下がりのある引き算」	学年	1年	生徒氏名		指導者	
目標＝評価規準		知・技	２位数－１位数（繰り下がりあり）の筆算の仕方を理解し、答えを求めることができる。						
		思、判、表	繰り下がりのある減法計算を、半具体物を用いて操作することができる。						
		学（＝態）	計算の仕方に興味をもち、意欲的に半具体物を操作している。						

＊どんな授業にしていくの？

・繰り下がりの意味を明確に捉え、半具体物から離れてもイメージできる力がつく授業。
・数を「10のまとまりが0つと1が△つ」とみる力をつけ、日常生活にも生かしていける授業。

指導と評価の実際

日付　R4年　6月２２日

評価（生徒の様子）

・繰り下がりのある引き算のブロック操作に慣れていたので、数字と対応させながら操作してもスムーズに理解することができた。
・自力で計算するときは、数字操作が複雑で戸惑う様子が見られた。

改善の視点

・補助の数字操作が複雑で戸惑う様子が見られたが、ブロック操作をイメージするのを助けている印象も受けたので、このまま本時と同じ数字の書き方で指導することにした。

「主体的・対話的で深い学び」の具体的な場面（具体的なやりとりと成果と課題：画像含む）

・ブロックを１回操作するごとに、数字で同じ操作を行った。「一の位から引けないからどうする？」と質問すると「（十の位から）1本借りてくる」と、繰り下がりの意味を捉えた回答ができた。
・机上が物でいっぱいになってしまい、思考の妨げになった。
　ブロックは必要数以外は全て片づけるようにしていく。

◎研究の成果と課題

【成果】
- 授業改善シートを活用し自分の授業を振り返ることで、指導方法や教材、課題などが生徒の実態に適しているか見直し、授業改善につなげることができた。
- 写真や動画で記録をとりながら授業検証を進めることで、客観的に自分の授業を振り返り、声掛けや指導方法を見直すことができた。
- 事例発表をとおし、目標設定や評価規準が適切であったか、見直すことができた。
- 教員間で授業について相談し合い、アドバイスをいただきながら授業実践を深めることができた。
- 「主体的・対話的で深い学び」の具体的な関わり方やアプローチ方法を考える機会となった。

【課題】
- 個別授業では、他の教員の授業を見る機会が少ないため、教員同士の授業参観を行う機会が設定できると、より授業改善につなげられる。
- 目標設定や評価基準の立て方について、教員間で相談し合えるとよい。
- 目標や評価規準ついて、生徒や学習グループの実態に応じて適切に設定できるよう、教師一人一人が実践を積み、理解を深めていきたい。
- 集団授業では実態の幅が広くなるため、授業グループごと単元の目標や評価規準についてしっかりと話し合う時間をとり、適切に設定し、正しい評価につなげていく。

◎学部研究のまとめ

今年度の研究をとおし、教師一人一人が「どのような力を身に付けさせたいのか」「どんな授業にしたいのか」という視点をもって授業実践に取り組み、自分自身の授業を見直すことができた。また、「生徒が学びたいという意欲をもって主体的に関わる授業となっているか」「生徒の実態に合った教材や発問が用意され、やりとりを大切にしながら必要とされる力を育むことができているか」という点に着目しながら授業検証を行い、PDCAサイクルで授業改善につなげることができた。授業実践をとおし、学びの充実を図るためには、まずは「何を身に付けさせたいか」という適切な目標を設定すること、そして、個々の実態や障害特性に応じて「毎時間の授業をどう仕組んでいくか」という視点が大切であり、発問の仕方や教材提示方法、タイミング等について工夫、改善していくことが「主体的・対話的で深い学び」の実現に繋がるということを確認できた。